【論　　文】

19世紀フランスの服飾と女性性
―ジョルジュ・サンドの実生活における男装と対話式小説『ガブリエル』における女主人公の異性装―

Costume and Femininity in 19th-Century France:
Transvestism of George Sand and Transvestism of the Heroine in the Interactive Novel *Gabriel*

新實　五穂
NIIMI, Iho

1．はじめに

ロマン主義の女性作家であるジョルジュ・サンドは、男名前の筆名を用いて百編以上の作品を執筆したことに加え、実生活で男装を行ったことで、つとに知られている[1]。とりわけサンドの男装に関しては、多様な動機とその様子が、ウラジミール・カレーニンによるサンドの評伝[2]、およびアンドレ・モロワによる伝記[3]、さらには池田孝江の著作『ジョルジュ・サンドはなぜ男装をしたか』[4]によって、既に明らかとなっている。サンドは４歳の時、軍人である父親が仕える上官の機嫌を取るため、軍服を身に着け、思春期の頃、家庭教師や異母兄弟の影響で、健康面での理由、および狩りや乗馬をするために男物の衣類を着用したとされている。また1830年代のパリでは、立ち居振る舞いが自由な上に、安い費用で着られるといった機能的および経済的な理由に加え、カフェ、居酒屋、劇場、美術館、新聞社などの場所に男性の友人たちと徒歩で出向き、自己の知的好奇心を満たすため、彼女は男性の服装を用いたと言われている。確かに、これらの論考によって、男装の動機とその様子を窺い知ることはできるものの、サンド自身の人生と執筆した作品とは常に密接に関係しているとの指摘があり[5]、彼女の小説を通して、実生活での男装をさらに理解することも可能であると推察される。加えて、サンドが著した作品には、女主人公が異性装をしたり、その恰好や振る舞いによって男性であるかのような印象を与える場面が存在しているにもかかわらず、これまで彼女の実生活での男装と併せて調査されることは行われてこなかった。

ゆえに本論文は、ジョルジュ・サンドが実生活で行ったとされる男装と、彼女が執筆した小説における女主人公の異性装を事例にして、女性の異性装が表象する個人的な意識は勿論、社会的な意識および背景を検討するものである。つまり本論文では、まず19世紀前半にパリで行われたサンドの実生活での男装について自伝『我が生涯の記』と書簡とを用いて分析し、次に従来の研究では注目されてこなかった彼女の小説『ガブリエル』における女主人公の服飾描写からも、多面的にジョルジュ・サンドにとっての異性装の意味を読み解くことを目的とする。そしてサンドの異性装が、単に女性性を否定し、男性として生きることを望んだ末の行為ではなく、女性が当時の社会によって強いられる制約を拒絶しながら、生きていくための手段であったことを明らかにしたい。

2．1830年代のパリで行われた実生活での男装

子供時代の受動的で、個人的な様相を呈した男装経験を経て、サンドは1830年代にパリでも男性の服装を身に着けるようになる。そもそも、サンドが1831年１月４日にフランス中部ベリー地方のノアンにある館を離れ、パリへと赴き、作家の道を志したのも、男装することを思い立ったのも、根本的な原因は、彼女の結婚生活が十年足らずで破綻を来したためであった。破綻の要因としては、読書や音楽に関心がなく、狩りにだけ熱中する夫にサンドが耐え切れなくなったことや、パリで法律を学ぶベリー地方出身の文学青年ジュール・サンドーと1830年７月30日に彼女は知り合い、恋に落ちたことなどが知られている。しかし直接の契機となったのは、1830年11月にサンドを罵倒した文面の夫の遺言書を彼女が発見したことであったよう

である。そして夫婦喧嘩の末に、彼女は、三ヶ月ずつ年に二回、すなわち一年のうちの半分をパリで過ごし、パリでの滞在時には月250フランを支給してもらう約束を夫との間で取り決めた。けれども、パリのサン＝ミッシェル河岸にある建物の屋根裏部屋に年300フランで居を構え、月15フランで門番の女性に家事を手伝ってもらい、一日２フランで安食堂の食事を運び込ませる生活を実際に送ってみると、サンドは自分の持ち金で実現可能な生活のレベルの低さを理解した。またゆとりのない、貧しい生活を送る一方で、サンドは当時の芸術、とりわけ演劇に相当な関心を寄せており、芸術家として生きて行くことを夢見ていた[6]。

そこでサンドは、まずベリー地方出身の友人たちの生活を参考にして、経済的な問題を打開しようとした。なぜなら、彼らが自分と同じ程度のわずかな生活費によってパリで暮らしながらも、知的な若者の関心を引く事柄を全て把握していたからである。友人たちは、文学や政治での出来事、劇場や美術館での感動、クラブや街での喧騒などを目にするため、パリの至るところに徒歩で出向いていた。彼らと同様に、サンドは徒歩で至るところへの外出を試みたものの、「パリの舗石の上では、私はまるで氷の上の船であった。二日で高級靴は壊れ、厚底の木靴で私は転んだ。上手にドレスをたくし上げることには不慣れであった。私は泥で汚れ、疲れて、風邪を引いた。そして樋の水を被ったビロードの小さな帽子は別としても、靴と衣服がものすごい速さで損なわれていくのを目の当たりにした」[7]と彼女が嘆く結果に終わった。ゆえに、彼女は服装の問題に立ち向かわざるを得なくなったのである。次に、この問題の解決策をサンドは母親に求めた。彼女の母親は3500フランの年金にもかかわらず[8]、非常に優雅で、ゆとりある生活をパリで送っていた。「八日のうち七日を部屋に引きこもって暮らすのでなければ、このひどい天候の中で、どのようにして最も質素な装いですますことができるのでしょうか」[9]と尋ねるサンドに、母は「私の年齢と習慣とを持ってすれば、十分に可能なことです。でも私が若かった頃、そしてあなたのお父さんにお金がなかった時、彼は私に男装させることを思いつきました。私の妹も同じように男装をして、我々は劇場でも、どんな場所でも、夫たちとともに歩いて至るところへ出かけました。私たちの家計は以前の半分に節約されたものです」[10]と応じて、男装を勧めた。サンドは、母親の忠告に従い、即座に男物の衣類を着用した様子を、次のように述べている。

> それゆえ、厚手の灰色のラシャ地で「哨舎風フロックコート redingote-guérite」を作らせ、同様にズボン pantalon とチョッキ gilet も作らせた。灰色の帽子とウールの大きなネクタイとを身に着ければ、私は完全に小さな一年生の学生であった。長靴が私をどれだけ喜ばせたかは言い表せない。…踵に小さな鋲を打った靴のおかげで、舗道の上をしっかりと歩けた。パリの端から端までを飛び回り、世界一周でもしたかのように思われた。その上、私の服装に恐れるものは何もなかった。私はどんな時でも駆け回り、時間も構わずに戻ってきた[11]。

ただし、1831年３月４日にサンドが息子の家庭教師で、友人でもあったジュール・ブコワランへ宛てた以下のような書簡も存在している。この書簡の中で、彼女の母親ではなく、ブコワランが男物の衣服を着用するように助言したことを「あなたが私にしてくれたある忠告」という表現で、サンドはほのめかしている。そしてこの書簡からも明らかなように、彼女の男装は、経済的な理由に起因するばかりではなく、作家として生きていく上での手段でもあった。

> 『パリ評論』誌では良い評価を得ていますが、私は苛立ってしまいました。私よりも有名な作家がたくさんいるからです。かなりの忍耐力が必要です。私は『パリ評論』誌と同じジャンルの雑誌である『ラ・モード』誌と『アルティスト』誌の二誌でも記事が書けるように働いています。どの雑誌でも成功を収めることができなければ、それは最悪の事態です。ともあれ、生きていかなければなりません。そしてそのためには、最低の仕事でもします。私は『フィガロ』紙にも記事を書きます。おお嫌だ！あなたがこのことを知っていたら！でも『フィガロ』紙の主宰者であるラトゥシュは、記事一つにつき７フランを支払ってくれます。そのお金で、あなたが私にしてくれたある忠告に従って、飲み、食い、芝居でさえ見に行きます。それは、私にとって、最も役立ち、最も興味深い観察の機会なのです。ものを書こうとする時、全てを見て、全てを知って、全てのことについて笑わなければなりません。ああ！やはり芸術家の生活よ、万歳！我々のスローガンは自由です[12]。

いずれにしろ、男性の服装を身に着けたサンドは、パリの至るところへ徒歩で出向き、あらゆる出来事を観察する機会に恵まれた。彼女はその状況を「現実の

生活が借り物の服装をした私の前に示されていた。男装によって、私は十分に男性として存在することができ、それまで愚鈍な田舎者だった私は、この恰好によって、永久に閉ざされていた社会を目にすることができた」[13]と語っている。さらに自伝には、男装したサンドが平土間席で演劇を鑑賞した際、彼女のあくびが原因で芝居のさくらや喝采師の人たちから喧嘩を売られたことや、サンドが頻繁に恰好を取り替えるため、食堂の主人が服装に合わせて、彼女を「ムッシュー」あるいは「マダム」と上手に呼び分けられなかったこと、ベリー地方の出身者からなるクラブで男装したサンドと出会った青年が翌日、女性の服装をした彼女と再会し、同一人物とは気付かなかったことなどの逸話が紹介されている。とくに劇場での男装に関しては、サンドは次のようにも述べている。

> 誰も私に注意を向けず、私の変装を疑わなかった。造作なく男性服を身に着けている上に、洒落っ気のない服装や容貌が全ての疑いを逸らしていた。視線を集め、捕らえておくには、私は非常にひどい身なりで、あまりに気取らない（いつものぼんやりして、とかく呆然とした）雰囲気だった。女性たちは、劇場においてさえ、変装する術をほとんど心得てはいない。彼女たちは、細いウエスト、小さな足、愛らしい動作、眼の輝きを犠牲にしたくないのだ。…ともかく、男性として注目されないためには、女性として注目されない習慣をかねてより持っていなければならない[14]。

周囲の注目を集めず、関心を引かないという点で、劇場でのサンドの男装は大成功を収めた。その成功は、彼女の気取らない普段の雰囲気と女性性の表出を抑制する習慣とによって支えられていたようである。そしてこの女性性の表出を抑える行為こそが、1830年代の半ばに彼女の男装を促す動機となった。自伝の中で、サンドは1835年の出来事として、「これらの男性たちと一緒にいるたった一人の女性として注目されないために、私は時折、少年の服装 habits de petit garçon を再び身に着けた。それは、私にリュクサンブールでの５月20日の例の法廷に気付かれずに入り込むことを可能にしてくれた」[15]と綴っている。彼女にとって1835年は、４月７日に著名な弁護士ミシェル・ド・ブールジュと知り合い、急進的な共和主義者である彼から強い影響を受け、共和主義者としての政治的立場を確固たるものにした年であった。そもそもサンドは、1830年より以前には、ほとんど政治に無関心であり、七月革命の頃に、野心家が利権を食いものにする政体ではなく、社会の最下層の人々により寛大で、有益な政体の必要性を痛感し、共和主義者としての立場を表明するようになった[16]。そして七月革命の結果として成立した七月王政や、1832年６月６日のサン＝メリー修道院における共和主義者たちの虐殺などの出来事によって、彼女は幻滅を味わった末、1835年にミシェルと出会い、1839年まで彼の影響を受け続けることになるのである。ミシェル・ド・ブールジュは、「巨大裁判procès monstre」、または「四月裁判procès d'avril」と呼ばれる裁判において、口頭弁論での雄弁さや舌鋒の鋭さからフランス中に名を馳せた人物である[17]。巨大裁判とは、1834年４月９日から12日にかけてリヨンの絹織物工たちが起こした蜂起に対して政府が厳しい弾圧を行ったことが引き金となり、パリやマルセイユ、サン＝テチエンヌ、リュネヴィルなどのフランスの各地で暴動が続発し、多数の逮捕者が出た結果、1835年４月より労働者、および反体制派の指導者など百人以上から成る逮捕者を一斉に裁いた裁判のことを意味している。サンドは1834年のリヨンでの蜂起と巨大裁判について、それ以前のパリでの暴動が政府の形態を変えることだけを目的としていたのに対し、リヨンでの暴動は労働者の組織や給与に関する問題などのより多くの人々が共有しやすい目的と社会主義的性格とを持っており、巨大裁判では王政派か、あるいは共和制派かという政治的立場を明白にすることが迫られていたと述べている[18]。彼女が1835年５月に男性の服装を身に着け、リュクサンブールの貴族院を訪れたのも、そこで開廷された一連の巨大裁判を傍聴するためであった。1835年５月にサンドが議員のドカーズ公爵へ宛てた書簡では、貴族院での男装について以下のように記されている。

> 公爵様、あなたの恩恵を望んでいます。明日、私を貴族院に入れさせて下さい。今日、私は入場券を持っていましたが、私のフロックコート redingote は認められませんでした。それで、あなたのお名前を厚かましくも引き合いに出し、入場することができました。もし親切にも二枚の入場券を送って下さるならば、明日も同じように貴族院へ行きたいのです。あなたのどんなご好意も、私は受ける権利を持っていません。それでも、この機会に思い切ってあなたにお願いをします[19]。

では、なぜこの書簡の宛先がドカーズ公爵議員であったのかというと、それは公爵の発言に関係している。1835年５月11日付の『ルアン新聞』には、５月10

日の巨大裁判におけるミシェル・ド・ブールジュの活躍をたたえる記述とともに、ドカーズ公爵に関する次のような記事が存在する。

> ここに、ドカーズ氏のことばがある。被告人の妻ボーヌ夫人は、貴族院尚璽に対して訴訟へ出席させて欲しいと懇願していた。ドカーズ氏は夫人へ次のように言った。「ご夫人よ、この件に関しては、我々の決議に揺るぎはない。だがあなたは、口頭弁論を聞く方法を手にしている。ここに入場券があるので、ズボン pantalon を穿きなさい。あなたはかわいらしい女性ですが、きっと素敵な青年になるでしょう。そして我々は、常に喜んであなたを招き入れることでしょう。」引用すれば、こと足りることばである。誰もが司法長官のこの心付けを高く評価するであろう[20]。

当時の女性たちは、たとえ被告人が夫であろうとも、政治訴訟の公判廷には決して出席できないという社会的な背景があり、その背景を受けて、ドカーズ公爵は上述の発言をしたものと思われる。番人も、男物の衣類を身に着けた女性が口頭弁論を聞きに来る姿を見て見ぬふりをしていたと指摘されている[21]。しかしサンドの場合は、見咎められ、ドカーズ公爵の名前を引き合いに出すことで、ようやく貴族院への入場を許可されたようである。貴族院の傍聴席から、彼女が自分と同じく共和主義を支持する友人たちを身振り手振りで鼓舞していた様子も伝えられている[22]。さらにサンドは、ミシェルの依頼で、挫けそうな被告人たちの気持ちを支えるため、「被告人たちへの弁護団の手紙」と題する書簡形式の草案を執筆したり[23]、この裁判の受刑者、およびその家族たちのために義援金を募ったりもしている[24]。

1830年代のパリで行われたジョルジュ・サンドの男装は、明らかに初期の段階の経済的理由や機能的な利便性だけでは、語り尽くせるものではなくなっていく。そしてその分岐点は、サンドが共和主義者としての立場を確固たるものにした1835年にあったと言える。群衆の動きを観察し、彼らのことばに耳を傾けながらブールジュや仲間の男性たちと散歩をする際、たくさんの男性の中にいる唯一の女性として注目を浴びないためにサンドが男物の衣類を着用したのも、裁判を傍聴するために貴族院で男性の服装を身に着けたのも、結局は彼女の政治活動に帰すことができるからである。

３．対話式小説『ガブリエル』における女主人公の異性装

確かに、前節で述べたようなサンドの実生活におけるパリでの男装は、あくまで便宜的で、彼女の個人的な性向にのみ左右されている部分も存在していると言えるかもしれない。しかしながら、彼女が実生活で男装を行っていたほぼ同じ時期、すなわち1839年４月の初めに執筆された、対話形式の小説『ガブリエル』における女主人公の異性装には、結婚制度や家族制度にまつわる社会的な事象が表象されている。

小説『ガブリエル』は、プロローグに５つの場面を加え、前半３部と後半３部の全６部からなり、作品では、男性として育てられた女主人公ガブリエルが、従兄弟との恋愛や不幸な結婚生活を経て、殺害されて亡くなるまでの悲劇的な人生が描き出されている。そして作中で、ガブリエルの名前が男性形もしくは女性形で記され、ガブリエルを指し示す人称代名詞が il（彼）あるいは elle（彼女）と変わることからも明らかなように、主人公は男性になったり、女性になったりと各場面で性別を変化させる。その性別の変動こそが小説の主題であり、そこには服装が介在している。女主人公が幼少期から思春期にかけて男物の衣類を身に着け、男性としての教育を施される点に加え、女性として不幸な結婚生活を経験したことが異性装を再び行う動機になっている点など、彼女の境涯からは、サンドの境遇とあまりにも似通った部分が存在している。それゆえ、1854年９月21日にサンドが追記した『ガブリエル』の小序文において、「『ガブリエル』は、その形式と与件から純粋な幻想に属するものである。芸術家たちの空想が、彼らの境遇と直接的に結び付くことは稀である。少なくとも、彼らの空想と実生活での気がかりとが同時性を持つことはない」[25]と断りを入れ、サンドはガブリエルのモデルが自身ではないことを訴えている。

いずれにせよ、作者と女主人公の境涯において、共通点が少なからず存在する興味深い作品であるにもかかわらず、これまで小説『ガブリエル』は、男性として育てられた女性を主人公とする物語ということ以外に取り立てて顧みられる作品ではなく、サンドの著作の中でも軽視され続けてきた。近年になって、ようやく女性性に関する彼女の考えが最も表れた作品の一つとして見直され始めてきており、作中で異性装が果たす役割についても論じられるようになってきている[26]。同作品の女主人公の異性装における象徴性については、拙稿「ジョルジュ・サンドの対話式小説『ガブリエル』における女主人公の異性装」[27]で詳述した

ので、ここでは、簡単にではあるが、『ガブリエル』における服飾描写を分析することを通して、女主人公の異性装が、結婚制度や家族制度に由来する女性の隷属状態を告発する装置の役目を担っていたことを明確にしておきたい。

そもそも、女性であるガブリエルが男性として育てられた背景には、彼女の祖父とその共謀者である家庭教師との企みが存在していた。というのも、男性から男性へしか遺産は相続することができないという法律の下で、孫娘のガブリエルに遺産を相続させ、名門ブラマント家を存続させていきたいと彼らが願ったからである。実際、プロローグの第４場で登場する17歳のガブリエルは、「当世風の狩猟用の衣服を身に着け、長髪の巻き毛を乱し、乗馬用の鞭を手にした姿」[28]で颯爽と現れ、文学や歴史、哲学に精通し、激しい運動や狩り、剣術などを好む祖父のもくろみ通りの誠実な青年に成長していた。しかしながら、ほどなくして、ガブリエルはそれとなく察してはいたが、無視し続けていた事実、すなわち、女性として生まれたものの、ブラマント家の遺産相続人に仕立て上げるべく男性として育てられた事実を知ってしまう。事実を知ったガブリエルは、「この男性から男性への遺産の相続は、きっと厄介で、不公平な法律なのだろうと思います。いくつもの分家の間での絶えざる所有の置換は、嫉妬の炎に火をつけ、恨みを掻き立て、近親に憎しみを引き起こし、父親に娘を嫌悪させ、女の子が誕生した母親に恥ずかしい思いをさせるだけです。われ何をか知る！野心と貪欲とが一体となり、ひもじい猟犬の群れのように寄せ集められた家族を貴族世襲財産の奪い合いへと駆り立てるに違いありません。それが、人類の恥やおぞましさとなる罪を引き起こしていることを私は歴史から学びました。いやはや、親愛なる先生、あなたはこれと同じように私を見なさなければならないのですね」[29]と家庭教師に述べ、遺産の相続法を痛烈に批判した。また女性として生まれたからには、財産も親族の愛情も放棄すべきものであるのに反して、それらを当然のごとく手にしている自分が呪われた人間であるかのようにガブリエルには思われた。その結果、祖父への復讐を果たすと同時に、自身の罪への償いとなる行為を思案し、自分よりも貧しい生活を送る従兄弟のアストルフを捜し出して、彼と平等に遺産を分配することを思い立つのである。

第１部では、借金を抱えるならず者で、放蕩者として評判になっていたアストルフをガブリエルは居酒屋で見つけ出し、心を通わせ（図１）、彼の親友として男性の姿のままで生きていく決意を固めるものの、第２部のカーニバルの日に、ガブリエルの決心は、アストルフによって無駄なものになってしまう。彼はガブリエルに女性の扮装をさせ、美しく着飾ったガブリエルを自分の婚約者として紹介することで、元恋人で、高級娼婦のフォスティナを奪った恋敵アントニオと、自分を裏切ったフォスティナに一泡吹かせてやりたいと企んでいたのである。他方で、ガブリエルは、バラの花と葉で頭髪を飾り、ブレスレットやレースの首飾り、手袋、透ける肩掛、簡素ではあるが、凝った白い絹のドレスを身に着け、鏡の前で戸惑い、以下のように自問を繰り返していた。

図１　ジョルジュ・サンドの息子モーリス・サンドによる「ガブリエル」の挿絵　16頁（横たわる人物がガブリエルで、右に佇む人物がアストルフ、ジュール・エッツェル編『挿絵入りジョルジュ・サンド全集 *Œuvres illustrées de George Sand*』７巻　1854年　パリ　フランス国立図書館　Ｚ－5449）.

何てこの服装は苦痛を与えるのだろうか！全てが窮屈で、息苦しい。コルセットは拷問のようで、動きづらいし！私はあえてまだ鏡で自分の姿を眺めてはいません。衣類の仲買人ペリーヌがよこす年寄りの詮索好きな視線によって、恐怖で縮み上がっていたのです。でも、ペリーヌがいなければ、きっと女性の衣服を着られなかったでしょう。…ああ！これが私？ペリーヌは私が美しい娘のように見えるだろうと言っていました。本当なのだろうか？…アストルフは私をぎこちなくて、滑稽だと思わないだろうか？この服装は慎みがない上に、袖があまりにも短い！…それにしてもア

ストルフは、何と厄介な気まぐれを！彼には単なる気まぐれでも、私にとっては非常識なものです。女性の服装を着用することへの嫌悪感にもかかわらず、これを経験してみたいという軽はずみな欲望を抑えきれなかったとは！どんな印象を彼に与えるのだろうか？私には優美さがないに違いない！[30]

このアストルフの企みは、フォスティナやアントニオが見事に騙されたため、大成功を収めた（図２）。けれども、ガブリエルの女性の姿に最も魅了されていたのは、他ならぬアストルフ自身であり、思わずガブリエルに愛の告白をしてしまう。ガブリエルはこれを拒絶し、二度と女性の恰好はせず、いっそう男らしく生活していくことを誓うものの、ドレスから男物の衣服に着替える際、着替えに時間がかかってしまったガブリエルは、アストルフにその姿を目撃されてしまい、本当は女性であるという事実が発覚して、二人は結ばれる。

図２　モーリス・サンドによる「ガブリエル」の挿絵　17頁（左がフォスティナ、中央がアストルフ、右のソファに座る人物がドレス姿のガブリエル）.

このように、アストルフがガブリエルを女性と認識する第２部までが物語の前半部分である。ここまで、ガブリエルの服装は、明らかに周囲の男性によって指示され、それをガブリエルが受け入れるという図式で決定されている。またカーニバルにおいて、アストルフがガブリエルにさせた女性の扮装に関しては、とりわけ重要な意味が込められていたと指摘されている[31]。なぜなら、男性だと思われていたガブリエルが女性の恰好をすることは、アストルフが異性愛者ではなく同性愛者であることを曖昧にするための手段になっていたのに加え、友人であるガブリエルを婚約者に仕立て上げ、妻として自分の所有物にしたいというアストルフの男性としての欲望を象徴化していると考えられるからである。結局のところ、ガブリエルが身に着ける服装は、それが男の恰好であれ、女の恰好であれ、自らの意思や欲求に基づく個人的な行為というものではなく、男性から受ける制約の中で暮らすガブリエルの劣等的な立場を表象しているように思われる。

第３部では、アストルフの所有する貧相で、荒廃した小さな館で彼らが新婚生活を送る情景が綴られている。狩りに喜んで出かけ、誰よりも上手く馬を乗りこなし、ギリシア語やラテン語の書物をはじめとするあらゆる種類の文学作品を読破する反面、家事や裁縫仕事を満足にこなせず、信仰心が薄いために福音書を読まないガブリエルを、アストルフの母親は快く思っていなかった。その結果、親子の間で口論になってしまい、興奮して、ガブリルにまで言い争いを仕掛けようとするアストルフに対して、彼女は次のように述べるのである。

このひどい侮辱が、私に衝撃を与えることはないわ。だってね、アストルフ、あなたが私を再び女性にさせても、私は男性であることを全くやめてはいなかったの。女性の恰好や女性がなすべき仕事を再開したとしても、男性としての教育によって発達し、培われた精神的に偉大な天分と冷静な外観とが、私には保たれていたのですもの。私は女性よりも多くのものを持っており、どんな女性も私に嫌悪感や恨み、怒りを生じさせられないといつも思っているわ。これは傲慢なのかもしれないけれど、くだらない夫婦喧嘩によって心を乱してしまったならば、私自身の身を落とすことになるだろうと思われるのよ[32]。

この後、アストルフは自分の母親を冷酷に非難し、ガブリエルに「あなたが私にしてくれた犠牲的行為、つまり女性の衣服を再び着用したこと、さらには、あなたが好み、習慣としていた活動的な生活や自由、精神の高貴な活動を放棄したことなどを忘却したならば、私はろくでなしでしょう」[33]と訴える。さらに過去の忌わしい出来事を忘れ、ブラマント家の家名や遺

産に左右されずに一人の女性として幸せに生きて欲しいと告げるアストルフにガブリエルは感銘を受け、彼らは二人だけで暮らすことを決断する。

第４部では、二人の結婚生活のその後の様子が描き出されており、アストルフがガブリエルを愛するあまり嫉妬に狂い、錯乱状態に陥ったため、彼らの結婚生活は破綻を来した。ガブリエルの方も、夫が妻を侮辱し、奴隷のように扱う自分たちの日常生活を「捕虜生活 captivité」と呼び、彼に以前と同様の愛情を抱けなくなっていた。また「現在では、私が望む時に男性でいられない状況が、辛いことを白状します。というのも、私の生活で女性の姿でいることが、久しく幸せではなかったからです」[34]とガブリエルは心中を打ち明け、妻としてアストルフとともに暮らすことを後悔するようにもなっていた。それゆえ、彼が言い争いの末に、ガブリエルを部屋に軟禁しようと試みた際、彼女は古くからの使用人と馬に乗ってアストルフのもとを去る。そして逃亡の際、ブラマント家へ戻る気持ちもないことを使用人に伝えたガブリエルは、自らの意思で「男物のコートと帽子」[35]を身に纏っていたのであった。

小説の最後にあたる第５部では、ガブリエルは「趣味のいい、飾り気のない黒い衣服を身に着け、剣を脇に携えた男性の姿」[36]で登場する（図３）。アストルフとの結婚生活を捨て、ローマへと向かったガブリエルは、教皇に面会して、修道院へ入る許可を得るとともに、祖父の死後、アストルフがブラマント家の全財産を相続できるように教皇の署名入りの文書を作成してもらう。そしてこの文書をアストルフに手渡すため、ガブリエルは身を隠して彼の様子を窺っていた。他方で、アストルフはガブリエルが実は自分のすぐ近くにいることにも気付かず、彼女の家庭教師と協力して、三ヶ月もの間、ガブリエルを捜索し続けていた。ただし、二人は全く違う目的から、彼女を捜し続けていたのである。アストルフは、結婚生活を続けなければ、ガブリエルが女性であるのに、遺産相続のために男性として生活してきた事実を世間に暴露すると彼女を脅してでも、ガブリエルと一生ともに暮らすことを望み、家庭教師は、孫の殺害を思い立った祖父の手から、ガブリエルを救出することだけを願っていたのであった。このような状況下で、高級娼婦フォスティナが酒に酔ったアストルフを誘惑し、家に連れ帰る光景や、二人が口づけをする姿をガブリエルは目撃してしまい、彼との愛が終わりを告げたことを自覚する。そしてガブリエルは以下のような物思いにふけり、自由を手に入れるためには自殺する以外に方法がないという考えに捕らわれる（図４）。

図３　モーリス・サンドによる「ガブリエル」の挿絵　33頁（左の人物がアントニオで、右の人物が男装姿のガブリエル）.

図４　モーリス・サンドによる「ガブリエル」の挿絵　41頁（橋の上に佇む人物が男装姿のガブリエルで、暗闇に潜んでいるのが暗殺者）.

私の頭をもたせかけた聖域であるアストルフの胸が、汚れた抱擁で冒涜されたことをいつか忘れ

られるのでしょうか？何ということ！今後、彼は疑念に駆られるたびに、いかがわしい行為に立ち戻り、彼の唇は娼婦たちの唇で汚されることでしょう！そしてアストルフは私をもまた汚すことを望み、私を娼婦のように扱うことを欲しています！彼は裁判所や人々の集まる場所に私を呼び寄せ、裁判官や群集の面前で、警官に私の男物の上着 pourpoint を引き裂かせることを願っているのです。アストルフの財産権や権力の証拠として、彼だけが打ち震えるのを目にしたこの女の胸が、全ての人々の視線にさらされることを彼は望んでいます！おお！アストルフ、あなたは間違いなく今はそのように思っていないけど、時がきて、どうしようもなくなったあなたは、非常に些細なことのために、躊躇したりはしないでしょう！よし！決めた。絶対に私はこの最後の侮辱に応じません。侮辱に耐えるぐらいなら、むしろ私の胸を見るであろう人々が怯えるまで、胸を引き裂き、めちゃくちゃにしてやる。誰も私の裸を見て、薄笑いは浮かべないでしょう。…神よ！私をお守り下さい！私はやっとの思いで、自殺の誘惑から抜け出しています！[37]

結局、ガブリエルは自殺ではなく、祖父が送り込んできた暗殺者によって殺害され、使用人やアストルフ、家庭教師が彼女の死体をテベレ川に架かる橋の上で発見する（図５）。悲しみに沈む使用人はアストルフを糾弾し、自分の罪を認めたアストルフは狂乱状態に陥る。また家庭教師は、ガブリエルの生い立ち、および性別に関する秘密を自分たちの手で遺体とともに葬り去ってしまうことを彼らに提案する。ガブリエルの死に対して、彼らは三者三様の態度を見せ、物語の幕は閉じる。

図５　モーリス・サンドによる「ガブリエル」の挿絵　45頁.

第４部の後半部分から第５部にかけて行われるガブリエルの異性装は、間違いなくアストルフとの悲惨な結婚生活を抜け出すための行為である。それは、男性として過ごしていた頃の生活や男性としての教育を授けられた事実を心の支えにするようになっていたガブリエルが、夫によって虐げられ、家庭の雑事だけに専心する妻の立場を離れ、アストルフからの束縛を受けない日常生活を手に入れることを意味している。さらに男性の服装を身に着けたとしても、ガブリエルがブラマント家には戻らず、一人で暮らしていくという選択をしたことにより、家長である祖父の命令からも解き放たれたい意図がそこには存在している。作者であるサンドは、結婚制度および家族制度に基づく男性による圧力が、主人公の女性の背景には一貫して働いている点をガブリエルの異性装を通して読者に意識させている。ただし、この場面での異性装について、ガブリエルが第５部の冒頭で最後の男装と決心しているように[38]、ガブリエルの異性装は、女性であることや女性として生きていくことを捨て、完全な男性になることを望んだ末の行為ではない。換言するならば、最後にガブリエルが自発的に行った異性装における目的は、男性として日常生活を送り、一生を終えることなどではなく、第３部のガブリエルの発言の中で、「女性よりも多くのものを持っている」と彼女が自負しているように、自身を女性以上の存在として保ち続け、なおかつ女性らしさという性の役割分担を否認することであったと思われる。

４．おわりに

近年、サンドと女性性、および性別二元論の問題については、主に彼女の男性名の筆名や書記法と関連して、論争が起きている。というのは、イザベル・ナジンスキーが唱えるサンドは二つの性が混同・融合して、性差が消滅し、性別の不明確な両性具有者 androgyne であったという説に対して[39]、マルチーヌ・リッドは、欠点も含め女性の性質を明白に有した上で、文学的な活動の際には男性の立場を自身に付与するというように、サンドは一つの性の中に男性性と女性性を備え、二つの性を混同していない双性性（バイセクシャ

ル）bisexuel であったと主張し[40]、意見を違えているからである。またサンドは、セックスを容認するものの、性差、およびジェンダー意識を否定したことが指摘されている[41]。母親や祖母、恋する女である時には、サンドは女性であることを自身の幸福や誇りとし、性別による領分の分担を受け入れ、個人的次元では自らの性に満足しているとされる。その一方で、彼女は、とりわけ執筆をする際、当時の社会が規定したジェンダー意識に異議を唱え、家父長制のしるしである結婚制度によって確固たるものになっていた女性の隷従を告発し、断固としてそれを拒絶したとされる。

サンドの実生活におけるパリでの男装と、彼女の小説『ガブリエル』における女主人公の異性装とを分析し、それらを比較検討してみると、サンドにとっての異性装は個人的な服飾観や性向、趣向などの個人の生活の中だけに留まる問題ではなく、当時の社会的な事象を表象していることは確かである。ただし、そこには、上記のような女性性に対するためらいや矛盾といった彼女の姿勢も少なからず反映されていると言えるのではないだろうか。

註

1　ジョルジュ・サンド研究の経緯とその成果に関しては、以下の書物に詳しい。秋元千穂他『十九世紀フランス女性作家 ジョルジュ・サンドの世界 生誕二百年記念出版』 第三書房　2003年.

2　Wladimir Karénine, *George Sand sa vie et ses œuvres 1804-1876,* t.1-4, Librairie Plon, Paris, 1899-1926.

3　André Maurois, *LÉLIA ou La vie de George Sand,* Hachette, Paris, 1952.（アンドレ・モロワ『ジョルジュ・サンド』河盛好藏、島田昌治訳　新潮社　1964.）

4　池田孝江『ジョルジュ・サンドはなぜ男装をしたか』 平凡社　1988年.

5　西尾治子「ジョルジュ・サンドの初期作品群と当時の思想家たち」『フランス文化の心―その言語と文学―』 駿河台出版社　1993年　31-50頁.

6　自伝の中で、サンドはパリでの当初の生活について述べた際、「私は田舎っぽさから脱することや、時代の流れに身を置くことを貪欲に求めていた。その必要性を感じていたし、それへの好奇心を持っていた。しかし最も目立った作品以外は、現代芸術について何も知らなかった。私はとくに演劇への渇望を持っていた」と綴っている。George Sand, *Histoire de ma vie,* t. 2, Gallimard, Paris, 1971, p. 116：《…j'étais avide de me déprovincialiser et de me mettre au courant des choses, au niveau des idées et des formes de mon temps. J'en sentais la nécessité, j'en avais la curiosité; excepté les œuvres les plus saillantes, je ne connaissais rien des arts modernes; j'avais surtout soif du théâtre.》（以下、自伝の引用部分は筆者の訳出。参考 ジョルジュ・サンド『我が生涯の記』２巻　加藤節子訳　水声社　2005年　570頁.）

7　*Ibid.,* p. 117：《…sur le pavé de Paris, j'étais comme un bateau sur la glace. Les fines chaussures craquaient en deux jours, les socques me faisaient tomber, je ne savais pas relever ma robe. J'étais crottée, fatiguée, enrhumée, et je voyais chaussures et vêtements, sans compter les petits chapeaux de velours arrosés par les gouttières, s'en aller en ruine avec une effrayante rapidité.》（参考 前掲書『我が生涯の記』２巻　570頁.）

8　サンドは自伝の中で、バルザックの「25000フランの所得がない限り、パリでは女性として存在することはできない On ne peut pas être femme à Paris à moins d'avoir vingt-cinq mille francs de rente.」ということばをわざわざ引用している。このことばは、バルサックが著した『結婚の生理学』によるもので、実際は次のような内容である。「妻が自分で料理をせず、華々しい教養を身につけ、コケットリーの感情を持ち、長椅子に横たわって閨房で何時間も過ごす権利を手中にして、魂の生活を享受するためには、地方では6000フラン、パリでは20000リーヴル（1793年以前の貨幣単位）の所得が少なくとも必要となる」Honoré de Balzac, *La Comédie humaine,* t. 11, Gallimard, Paris, 1980, p. 933：《Pour qu'une femme ne fasse pas elle-même sa cuisine, ait reçuune brillante éducation, ait le sentiment de la coquetterie, ait le droit de passer des heures entières dans un boudoir, couchée sur un divan, et vive de la vie de l'âme, il lui faut au moins un revenu de six mille francs en province ou de vingt mille livres à Paris.》（引用部分は筆者の訳出。参考 オノレ・ド・バルザック『バルザック全集』２巻　安士正夫、古田幸男訳　創元社　1973年　36頁.）19世紀中葉のフランス人の年間所得は、自営店主3830フラン・下請けの仕立屋3271フラン・下級官吏1200フラン・肉体労働者830フラン・屑屋651フランとされ、3500フランの年金はプチブルジョア階級の所得にあたる。なお、パリに住む学生の年間生活費は、1200～1500フランとされる。（鹿島茂『馬車が買いたい！―19世紀パリ・イマジネール―』 白水社　1990年　167頁.）

9　George Sand, *Histoire de ma vie,* t. 2, op.cit., p. 117：《…comment suffire à la plus modeste toilette dans cet affreux climat, à moins de vivre enfermée dans sa chambre sept jours sur huit?》（参考 前掲書『我が生涯の記』２巻　571頁.）

10　*Ibid.,* p. 117：《C'est très possible à mon âge et avec mes habitudes; mais quand j'étais jeune et que ton père manquait d'argent, il avait imaginè de m'habiller en garçon. Ma sœur en fit autant, et nous allions partout à pied avec nos maris, au théâtre, à toutes les places. Ce fut une économie de moitié dans nos ménages.》（参考 前掲書『我が生涯の記』２巻　571頁.）

11　*Ibid.,* pp. 117-18：《Je me fis donc faire une redingote-guérite en gros drap gris, pantalon et gilet pareils. Avec un chapeau gris et une grosse cravate de laine, j'étais absolument un petit étudiant de première année. Je ne peux pas dire quel plaisir me firent mes bottes…Avec ces petits talons ferrés, j'étais solide sur le trottoir. Je voltigeais d'un bout de Paris à l'autre. Il me semblait que j'aurais fait le tour du monde. Et puis, mes vêtements ne craignaient rien. Je courais par tous les temps, je revenais à toutes les heures…》（参考 前掲書『我が生涯の記』２巻　571頁.）

12　George Sand, *Correspondance,* t. 1, éd.Georges Lubin, Classiques Garnier, Paris, 1964, p. 818：《On m'agrée dans la Revue de Paris mais on me fait languir, il faut que les noms connus passent avant moi. C'est trop juste, patience donc. Je travaille à me faire inscrire dans La Mode et dans l'Artiste, deux journaux du même genre que la Revue. C'est bien le diable si je ne réussis dans aucun. En attendant il faut vivre; et pour cela; je fais le dernier des métiers, je fais des articles pour le Figaro. Pouah! Si vous saviez ce que c'est! Mais de Latouche paye 7 fr la colonne et avec ça on boit, on mange, on va même au spectacle, en suivant certain conseil que vous m'avez donné. C'est pour moi l'occasion des observations les plus utiles et les plus amusantes. Il faut quand on veut écrire, tout voir, tout connaître, rire de tout. Ah! ma foi vive la vie d'artiste! Notre devise est liberté.》

13　George Sand, *Histoire de ma vie,* t. 2, op.cit., p. 132：《…la vie réelle se révélait à moi sous cet habit d'emprunt qui me permettait d'être assez homme pour voir un milieu à jamais fermé sans cela à la campagnarde engourdie que j'avais été jusqu'alors.》（参考 前掲書『我が生涯の記』２巻　585頁.）

14　*Ibid.,* p. 118：《Personne ne faisait attention à moi et ne se doutait de mon déguisement. Outre que je le portais avec aisance, l'absence de coquetterie du costume et de la physionomie écartait tout soupçon. J'étais trop mal vêtue, et j'avais l'air trop simple (mon air habituel, distrait et volontiers hébété) pour attirer ou fixer les regards. Les femmes savent peu se déguiser, même sur le théâtre. Elles ne veulent pas sacrifier la finesse de leur taille, la petitesse de leurs pieds, la gentillesse de leurs mouvements, l'éclat de leurs yeux…Au reste, pour n'être pas remarquée en homme, il faut avoir déjà l'habitude de ne pas se faire remarquer en femme.》（参考 前掲書『我が生涯の記』２巻　571-72頁.）

15　*Ibid.,* p. 331：《Pour n'être pas remarquée comme femme seule avec tous ces hommes, je reprenais quelquefois mes habits de petit garçon, lesquels me permirent de pénétrer inaperçue à la fameuse séance du 20 mai au Luxembourg.》（参考 前掲書『我が生涯の記』３巻　159頁.）

16　George Sand, *Correspondance,* t. 1, op.cit., p. 705-6：《Et moi, je crois, qu'il nous fallait une république (non une tyrannie sanguinaire comme ce qu'on appelait république au temps passé) mais une constitution plus généreuse, plus profitable aux dernières classes de la société, moins exploitable pour les ambitieux…》サンドは、1830年代には共和主義者、1840年代にはピエール・ルルーの影響によって社会主義的共和主義者であったとされる。彼女の政治活動に関しては、次の書物に詳しい。ミシェル・ペロー編『サンド 政治と論争』持田明子訳　藤原書店　2000年.

17　ミシェル・ド・ブールジュは、ヴァール県で1797年10月30日に木こりの息子として生まれた。王党派の一味に虐殺された父親の死から七ヶ月後に誕生したため、母と祖父から「父親の復讐を果たすのはお前だ」と言われ、育てられた。ミシェルは1826年に弁護士となり、誰におもねることもなく、とくに政府には厳しい態度で立ち向かい、政治訴訟を扱う弁護士として有名になって、訴訟での彼の口頭弁論や即興演説は、大評判を呼んだ。1837年以降、何度か代議士に選ばれたが、目立った活躍はなく、スイスやベルギーに亡命後、フランスへ戻り、1853年３月16日にモンペリエで亡くなった。ミシェルとサンドの関係は、不完全な形の書簡の複製以外にも、自伝および彼女の著作『ある旅人の手紙』の第六信によって知ることができる。（George Sand, *Correspondance,* t. 3, op.cit., pp. 889-91.）

18　George Sand, *Histoire de ma vie,* t. 2, op.cit., p. 323：

《Il n'était plus guère possible de rester neutre dans ce vaste débat qui n'avait plus le caractère des conspirations et des coups de main, mais bien celui d'une protestation générale où tous les esprits s'évaillaient pour se jeter dans un camp ou dans l'autre. La cause de ce procès (les événements de Lyon) avait eu un caractère plus socialiste et un but plus généralement senti que ceux de Paris qui les avaient précédés. Ici il ne s'était agi, du moins en apparence, que de changer la forme du gouvernement. Là-bas le problème de l'organisation du travail avait été soulevé avec la question du salaire et pleinement compris.》(参考 前掲書『我が生涯の記』3巻 151頁.) 引用文中の「どちらかの党派 dans un camp ou dans l'autre」とは、前の段落にある「(七月) 王政と共和制 Monarchie et République」を指している。

19 George Sand, *Correspondance,* t. 2, op.cit., pp. 889-90：《Monsieur le Duc, Je viens vous demander une grâce, c'est de me faire entrer demain à la chambre des pairs. J'avais un billet aujourd'hui. On a récusé ma redingote, je me suis réclamée de vous, calomnieusement et audacieusement. On m'a laissé passer. J'en ferai autant demain, si vous avez la bonté de m'envoyer deux billets. Je n'ai aucun droit à votre bienveillance et pourtant j'ose vous la demander en cette occasion.》この書簡は「金曜日の晩」に書かれたと書簡の末尾に記されているが、サンドの書簡集の編纂者であるジョルジュ・リュバンは書簡の日付を特定できていない。というのも、サンドが5月20日にしか裁判を傍聴していないと自伝で述べており、20日が水曜日にあたるためである。

20 *Journal de Rouen,* 11 mai 1835：《Voici un trait et un mot de M. Decazes. Mme Beaune, la femme de l'accusé, insistait auprès du grand-référendaire pour assister au procès. 《A ce sujet, Madame, lui dit M. Decazes, nos résolutions sont inébranlables; mais vous avez un moyen de pénétrer dans l'enceinte des débats. Voici un billet, mettez un pantalon; vous êtes une jolie femme, vous serez un joli garçon, et nous aurons toujours plaisir à vous recevoir!》Il suffit de citer; chacun appréciera cette gracieuseté de grand-prevôt.》この記事の一部は、『書簡集』の註で引用されている。(George Sand, *Correspondance,* t. 2, op.cit., p. 890.)

21 女性史家ミシェル・ペローは、男装した女性が100人ほど貴族院内に入り込んでいた事実を指摘している。(前掲書『サンド 政治と論争』 24頁.) また19世紀の政治訴訟において、女性の排除が厳しくなされていたこととともに、重罪訴訟では女性の感動しやすさを理由に、女性の締め出しが試みられていたことも指摘している。(ミシェル・ペロー『歴史の沈黙―語られなかった女たちの記録―』持田明子訳 藤原書店 2003年 441頁.)

22 Jules Janin, *Biographie des femmes auteurs contemporaines françaises,* t. 1, Armand-Aubrée, Paris, 1836, pp. 451-52：《Au procès d'avril, on a vu George Sand dans une tribune de la chambre des pairs encourager du geste et du cœur ses amis politiques…》

23 サンドが著した書簡形式の草案は感傷的で、説教のようであり、ミシェルは憤慨と怒りによって被告人たちを活気づけるため、貴族院を激しく攻撃するものへと文面を書き直した。彼の草案は貴族院で有罪の判決を受けるほど、ことばの粗暴さや辛辣な調子があり、共和主義の弁護団からの脱退者を招くとともに、弁護士たちの間に混乱を引き起こして、ミシェルの同志たちの間でも彼を誹謗中傷する者たちを数多く生じさせる結果となった。George Sand, *Histoire de ma vie,* t. 2, op.cit., p. 341-44. (前掲書『我が生涯の記』3巻 169-72頁.)

24 George Sand, *Correspondance,* t. 2, op.cit., p. 891：《Je viens vous prier de secourir de malheureux prisonniers et leurs familles abandonnées qui s'épuisent pour eux, nous avons ouvert une petite souscription; un coupon de liste m'a été confié; donnez-moi votre offrande, elle portera bonheur à ma collecte.》

25 George Sand, *Gabriel, Œuvres complètes,* t. 19, Slatkine, Genève, 1980, p. 151：《Gabriel appartient, lui, par sa forme et par sa donnée, à la fantaisie pure. Il est rare que la fantaisie des artistes ait un lien direct avec leur situation. Du moins, elle n'a pas de simultanéité avec les préoccupations de leur vie extérieure.》

26 Françoise Massardier-Kenney, *Gender in the fiction of George Sand,* Rodopi, Amsterdam, 2000; Françoise Genevray, ""Aurore Dupin", épouse Dudevant, alias George Sand: de quelques travestissements sandiens", *Travestissement féminin et liberté(s),* L'Harmattan, Paris, 2006.

27 拙稿「ジョルジュ・サンドの対話式小説『ガブリエル』における女主人公の異性装」『日本家政学会誌』60巻6号 日本家政学会 2009年 49-58頁.

28 George Sand, *Gabriel,* op.cit., p. 162：《Gabriel en habit de chasse à la mode du temps, cheveux longs, bouclés, en désordre, la fouet à la main.》

29 *Ibid.,* pp. 171-72：《Je dis que cette transmission d'héritage de mâle en mâle est une loi fâcheuse, injuste peut-être. Ce continuel déplacement de

possession entre les diverses branches d'une famille ne peut qu'allumer le feu de la jalousie, aigrir les ressentiments, susciter la haine entre les proches parents, forcer les pères à détester leurs filles, faire rougir les mères d'avoir donné le jour à des enfants de leur sexe!…Que sais-je! L'ambition et la cupidité doivent pousser de fortes racines dans une famille ainsi assemblée comme une meute affamée autour de la curée du majorat, et l'histoire m'a appris qu'il en peut résulter des crimes qui font l'horreur et la honte de l'humanité. Eh bien, qu'avez-vous à me regarder ainsi, mon cher maître?》

30 *Ibid.,* p. 210：《Que je souffre sous ce vêtement! Tout me gêne et m'étouffe. Ce corset est un supplice, et je me sens d'une gaucherie!…je n'ai pas encore osé me regarder. L'œil curieux de cette vieille me glaçait de crainte!...Pourtant, sans elle, je n'aurais jamais su m'habiller….Mon Dieu! est-ce moi? Elle disait que je ferais une belle fille…Est-ce vrai?… Astolphe ne me trouvera-t-il pas gauche et ridicule? Ce costume est indécent…Ces manches sont trop courtes!…Quelle étrange fantaisie que la sienne! elle lui paraît toute simple, à lui!...Et moi, insensé qui, malgré ma répugnance à prendre de tels vêtements, n'ai pu résister au désir imprudent de faire cette expérience!...Quel effet vais-je produire sur lui? Je dois être sans grâce!...Oh! pour ceci, je n'y comprends rien. Mais, est-ce qu'une femme ne pourrait pas plaire sans ces minauderies?》

31 Françoise Massardier-Kenney, op.cit., p. 134.

32 George Sand, *Gabriel,* op.cit., p. 248：《Ces outrages ne m'atteignent pas. Vois-tu, Astolphe, tu m'as fait redevenir femme, mais je n'ai pas tout à fait renoncé à être homme. Si j'ai repris les vêtements et les ocupations de mon sexe, je n'en ai pas moins conservé en moi cet instinct de la grandeur morale et ce calme de la force qu'une éducation mâle a développés et cultivés dans mon sein. Il me semble toujours que je suis quelque chose de plus qu'une femme, et aucune femme ne peut m'inspirer ni aversion, ni ressentiment, ni colère. C'est de l'orgueil peut-être; mais il me semble que je descendrais au-dessous de moi-même, si je me laissais émouvoir par de misérables querelles de ménage.》

33 *Ibid.,* p. 249：《Je serais un misérable si j'oubliais quel sacrifice tu m'as fait en reprenant les habits de ton sexe et en renonçant à cette liberté, à cette vie active, à ces nobles occupations de l'esprit dont tu avais le goût et l'habitude.》

34 *Ibid.,* p. 261：《À présent, j'avoue qu'il me serait pénible de renoncer à être homme quand je veux; car je n'ai pas été longtemps heureuse sous cet autre aspect de ma vie…》

35 *Ibid.,* p. 273：《GABRIELLE, avec un manteau et un chapeau d'homme.》

36 *Ibid.,* p. 275：《GABRIEL, en homme. Costume noir élégant et sévère, l'épée au côté.》

37 *Ibid.,* p. 313：《…pourrais-je jamais oublier que son sein, le sanctuaire où je reposais ma tête, a été profané par d'impures étreintes? Eh quoi! désormais, chacun de ses soupçons pourra ramener ce besoin de délires abjects et l'autoriser à souiller ses lèvres aux lèvres des prostituées! Et moi, il veut me souiller aussi! il veut me traiter comme elles! il veut m'appeler devant un tribunal, devant une assemblée d'hommes; et là, devant les juges, devant la foule, faire déchirer mon pourpoint par des sbires, et, pour preuve de ses droits à la fortune et à la puissance, dévoiler à tous les regards ce sein de femme que lui seul a vu palpiter! Oh! Astolphe, tu n'y songes pas sans doute; mais quand l'heure viendra, emporté sur une pente fatale, tu ne voudras pas t'arrêter pour si peu de chose! Eh bien! moi, je dis: Jamais! Je me refuse à ce dernier outrage, et, plutôt que d'en subir l'affront, je déchirerai cette poitrine, je mutilerai ce sein jusqu'à le rendre un objet d'horreur à ceux qui le verront, et nul ne sourira à l'aspect de ma nudité...O mon Dieu! protégez-moi! préservez-moi! j'échappe avec peine à la tentation du suicide!...》

38 *Ibid.,* p. 275：《O Dieu! pardonne-moi cette dernière tromperie.》

39 Isabelle Hoog Naginski, *George Sand L'écriture ou la vie,* Éditions Champion, Paris, 1999, pp. 33-52.

40 Martine Reid, *Signer Sand: l'œuvre et le nom,* Belin, Paris, 2003, p. 112.

41 前掲書『歴史の沈黙』 392, 452-53頁. サンドは母親や祖母としての立場で、幸せを感じながら家事労働に専念する反面、女性の文学の凡庸さや女性作家として格下げされる社会的地位を拒み、男性の筆名を完全に受け入れ、1863年の『ある若い娘の告白』で初めて女性として語ったに過ぎないほど、公的文書では自身について常に男性形で語ることを一貫して実践していたともペローは述べている。